

第 1779 回（3 月 23 日）
環境問題からみた貿易自由化の進展

（市民フォーラム 2001 共同代表）

田 中 優

（1）ユーカリ植林の世界的拡大

今、世界中で植林がブームになっている。企業が排出する二酸化炭素分を帳消しにするために、植林しようというものである。しかし実際に世界で植林される樹種は、圧倒的にユーカリに偏っている。このユーカリの植林が伸びてきたのは、何も地球温暖化が問題にされてからのことではない。ユーカリは紙の生産のためのパルプに使われるのである。

途上国はその名の通り、工業が発展途上であるが故に、輸出できる商品は原料に偏っている。しかし、原料の価格は石油危機の時代を通じて高くなり、その後は債務危機に襲われ、相対的に極めて安い価格のままとなっている。農作物の場合でも、労働原価も賄えない赤字輸出を余儀なくされる事例が増えている。その中で、新たな商品作物として登場したのがユーカリであった。ユーカリは成長が早く、OA 紙などの高級パルプ材としてニーズが高いため、これまでブラジルやタイ・ベトナムなどで植林されていたが、さらに世界中へと広がりつつある。

（2）ユーカリ植林の問題点

しかしユーカリには、その葉から滲出するユーカリオイルの問題がある。ユーカリオイルは私たちの利用する塗り薬や喉飴、殺菌スプレーなどに利用されているように、極めて高い殺菌性を持っている。これが雨と共に地面に降り注ぎ、地中が殺菌されてしまうことが起きている。それによって下草が生えなくなり、微生物が殺菌されて、土壌流出すら招くほどの土地の劣化を引き起こしている。さらにユーカリは成長が早い代わりに、土壌中の養分と水分を非常に多く奪うこととなり、その結果、周囲の浅い井戸が枯れたり水田が

干上がる被害をもたらしたりする。この両方の性質によって、周囲の農地では作物が不稔化したり、育ちが悪くなったりする被害が出ている。日本の製紙会社と ODA も関わって大規模に植林されたタイでは、現地の人たちによって「ギャングの木」とまで呼ばれている。

（3）貿易自由化がもたらすもの

ユーカリパルプを輸出するタイは、かつて森の国と呼ばれていたにも関わらず、現在では国土の 20% 程度しか森が残っていない「木材の輸入国」となっている。他方、ユーカリパルプを輸入する日本は、現在でも国土の 70% 近くを森林に覆われる「森の国」である。日本国内で毎年成長する木材の累積量は、ほとんど自給可能な量に達するというのに、放置され荒れ果てている。しかもタイは日本のように林業に向く国土でもなければ、造林技術の蓄積もない。

彼らがユーカリを植えるのはそれが儲かると考えるためである。儲からない農業に代えてユーカリを植えるのだ。ユーカリは食べられないが、それ以外の作物を作ったところで彼らの口には入らない。ユーカリは切り倒しても自然萌芽によって生えてくるが、それを数回繰り返すと極端に成長が落ちる。土地はすっかり痩せ果てて、他の作物を育む力も失われる。

現在の貿易は国の経済的な力によって支配されており、商品作物はその土地や気候などから適地とされる場所で生産されているのではない。ただコスト的に成り立つ土地で生産されるだけのことである。ユーカリが、今、二酸化炭素の排出を減らしたくない先進国の意志により、二酸化炭素をそれほど排出していない途上国に植えられていく。「地球緑化」という大変きれいな言葉で、途上国の人々の耕す土地が奪われ、世界中が破綻の淵に向けて邁進し続けているのである。